

棟(センダン)

大崎八幡宮の西側を国道 48 号から分かれて、国見小学校に向かう車道がある。その坂道沿い左側の民家の庭先に、センダンが植えられている。この木が薄紫色の花を着けると、もうすぐ夏の到来である。



「卯の花の匂う垣根にホトギス・・・」で始まる佐々木信綱作の「夏は来ぬ」は、戦前の文部

省制定の学校唱歌であるが、今でも多くの人に歌いつがれている。曲の旋律もさることながら、初夏の自然をさりげなく綴った歌詩には、いかにも日本人の琴線を揺さぶる響きがこめられている。

この歌の 4 番目に「棟散る」の詩がある。明治期まではセンダンを棟(あふち)と呼び、その花の咲き散る様子が歌にうたわれてきた。万葉集にも、アフチとホトギスを組み合わせた歌が数首あるので、こんなところから「夏は来ぬ」に取り入れられたのであろう。なお、「あふち」は通常アウチと発音するが、「ふち」は藤色を意味するのでアフヂと濁音でよむべしという人もいる。

枕草子に「木のさまぞ憎けれどあふちの花いとをかし、あちこちに咲きて必ず5月5日にあふ(同時に咲く)もをかし」とあるように、西国では端午の節句をこの木の開花日としていた。



センダンの花は、ほのかな香気を発する。それが故に、5月5日にはセンダンの花とショウブ、ヨモギの葉を薬玉(くすだま)の中に入れ、邪気を払うセレモニーに使われていた。ただし、センダンに香気があるといっても「梅檀は双葉より香し」のセンダンではない。こちらの梅檀は、インドに自生する香木ビャクダン(ビャクダン科)のことである。

センダンは宮城県に自生種はないが、庭園や公園には良く植えられている。角田市の旧西根小

センダンは宮城県に自生種はないが、庭園や公園には良く植えられている。角田市の旧西根小

学校の校庭には、明治時代に植えられた胸高直径 1m を超す大木があり、今なお元気で花を咲かせる。

センダンの花を詠んだ有名な歌が次の万葉歌。

妹が見し棟の花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干^ひなくに(巻 5・798)

筑前守山上憶良が太宰府に赴任中、最愛の妻を亡くした。それを悼みて詠んだ長歌に添えた反歌の中の一首で、生前、あなたが愛していた我が庭のセンダンの花はもう散りそうです。深い悲しみに泣く私の涙がまだ乾きもしないのに、というのが大意。いかにも憶良の人柄が偲ばれる哀歌である。

憶良の秀歌のあと、興をそぐようが悪いが、センダンの材は江戸時代、罪人のさらし首を架ける獄門台に使われた。その昔、俘囚貞任の首を棟の木に梟したことに由来する。家具材として重宝されるセンダンにとって、まことに迷惑千万な話しではある。

(大柳 雄彦)

【以下に木の解説】

センダン(センダン科)

主に西日本の沿岸部に自生する落葉高木。太い枝が横に広がり、樹型は半球状。羽状複葉で互生。葉の脇から花柄を伸ばし、多数の薄紫色の小花をつける。これが秋には黄色の楕円状の果実に熟し、冬まで残る。「夏は来ぬ」で歌われるためか、学校校庭に良く植えられる。